

現代中国語における強調

— とくに“是……的”を中心にして —

横 山 宏

中国で発表される数多くの政府声明や一般の刊行物などを見ると中国語の特色としての簡潔さ、力強さを感じるとともに、その内容やその用語の問題を除いても、その表現形式にかなりの強調がふくまれており、内容をより一層強調しているように感ぜられる。それと同時にその強調がどの程度の意味をもつものであるかをおしはかることはきわめて困難なものとなっている。その困難の解明に近づくために中国語における強調を考えてみたい。

その手がかりとして、中国語の一つ文型“是……的”をえらび出し、それがどう強調を示すかについて見てみたい。

I

現代中国語の文の分類については中国の文法学者のなかでもいまだ統一の見解は出されていない。それぞれの学者の意見は分れるが、その文の内容をみると意見の差は著しく大きいものとはいえないようである。これまでのおもな文法書からその分類をみてみよう。

黎錦熙は文を三つに分けている。「この三分類は語意の面から帰結され、叙述句が叙述文に発展し、描写句が‘描写文’に発展し、判断句が‘説明文’と‘理論文’に発展する。⁽¹⁾ として、大きく三つに分類している。

王力は「文は三つに分け、丁度実詞の三種類に相当する。われわれはそれらの関係をきれいな一つの表にすることができる。

- (1) 判断文：名詞をもって述語とする、
- (2) 描写文：形容詞をもって述語とする、

(3) 叙述文：動詞をもって述語とする。」⁽²⁾

と分類し黎の分類と相似している。

呂叔相・朱德熙によれば文の型態としてはのべていないが、「述語の類型」として次のようにのべている「中国語の文の述語は一つの動詞をもつとは限らない。これはふつうの西欧の言語と異なる点である。述語のおもな成分は一つの動詞であり、一つの名詞あるいは一つ形容詞である。たとえば

動 詞——我們依靠人民的力量。

名 詞——今天端午。

形容詞——那可太危險。」

と分類し、⁽³⁾ 上述の二氏の分け方と大体同一である。

中国科学院語言研究所編『中国語文法講話』は「1. 体言が述語になっている文, 2. 形容詞が述語になっている文, 3. 動詞が述語になっている文, 4. 主語+述語構造が述語になっている文」の四つをあげている。⁽⁴⁾ まえの三氏とくらべて四番目、たとえば「我頭痛。」〈ぼくは頭がいたい〉をあげているのである。この点をのぞくと分類はまえの三氏とほぼ同じである。

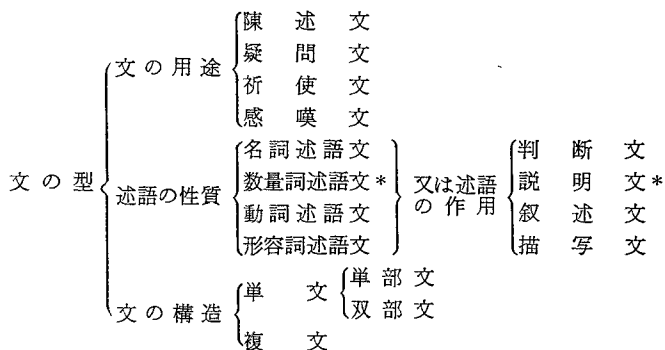
最後に曹伯韓は「述語はいくつあるか」として「第一種の述語、おもな語は動詞である。……第二種のおもな語は形容詞である。……第三種の述語、おもな語は名詞（あるいは代名詞）である」⁽⁵⁾ とのべている。これはそれぞれ叙述文、描写文、判断文に相当するものである。

以上のべたように、中国語の文の種類は叙述文、描写文、判断文に分けられよう。これらのほかにも、単語文、無主語文、主述文、複文、あるいは叙述文、命令文、疑問文、感嘆文などに分類することができるが、⁽⁶⁾ 構造を分析するときに不備が存在し、それぞれの差異を詳述できないうらみがある。文の型を表示すると第1表のようになる。⁽⁷⁾

この三つないし四つの中国語文の種類を定義づけるとどのようになるだろう

か。叙述文は「人あるいは物がどんな動作をし、どんなことを考え感じ、どんな行為があり、またどんな発展変化があるかを説明したり、もしくは人あるいは物がどんな動作、考えまたは行為と関係があるかを説明する……」、⁽⁸⁾ 描写

第 1 表



*は革命戰士万万千。(數詞)，全家二十多口人(名詞)，反正名兒不一樣，骨子里差不多。(形容詞)，全院能够容納一千五百人(動詞)

文については「どのような人あるいは事物も、性質状態の面では形象、色彩、品質、輕重、大小、状態、用途といった特徴をもっている。ある人あるいは事物の特徴をのべるということは、つまりその人あるいは事物に対して描写を加えることである」⁽⁹⁾ と説明し、最後に判断文は「ある人がだれであるかを説明したり、あるいは事物がなんであるかを説明するのを判断文という」⁽¹⁰⁾ とそれぞれ定義づけている。

さて、具体的にはどのような文であろうか。

叙述文は主語がなにをするかを説明するのでつぎのようになるであろう。

- | | |
|----------------------|--------------|
| 1. 主語＋動詞 | 他来了。 |
| 2. 主語＋動詞＋目的語 | 我買了一本書。 |
| | 我買了一本書和一只鉛筆。 |
| 3. 主語＋動詞＋間接目的語＋直接目的語 | 他送我一本書。 |
| | 他告訴我一個消息。 |

描写文は主語がどのようなものであるかを説明するとすれば述語は形容詞が中心となる。

主語＋形容詞	他聰明。
	這間房子大。

判断文は主語がなんであるかを説明する文であるから判断詞“是”をもつ。
しかし日付、曜日、天気、本籍、いつの時代の人などをあらわすときには是を用いなくてもよい。この場合でも否定のときかならず“是”を用いる。

今天星期一。昨天陰天。孔子山東人。

今天不是星期一。昨天不是陰天。孔子不是廣東人。

しかし、上例の肯定の場合でも“是”を用いることがある。“今天是星期一”と言えるのである。“是”のない場合と意味は基本的に同じであるが、“是”がある場合は区別する気持を示すことができる。すなわち、そのほかの曜日と区別しようとするときには“今天是星期一”と表現し“今天星期一”とは言わない。

(1) 北京是中国的首都。(ペキン是中国の首都である)

(2) 他是工人。(かれは労働者である)

上例(1)は“中国的首都是北京。”と言いかえることもできる。意味も基本的には変わらないが、つぎのような差異がある，“北京”がなんであるか知らない人にたいしては“北京是中国的首都。”と言うのであり、中国の首都がどこで

第 2 表

主 謂 文	名詞謂語句	{ 謂語が名詞・名詞性語 繫詞を用いる(分類解釈)	{ 所 属	今天國慶日。
			{ 部分特性	那個人黃頭髮。
			{ 数的相等	一千元三斤白菜。
	形容詞謂語句	{ 形容詞 形容詞性語	{ 他是我的朋友。	
			{ 節約就是不浪費的意思。	
			{ 事實總是事實。	
	動詞謂語句	{ 賓語のないもの 賓語をもつもの 二つの賓語をもつもの	{ 不懂就是不懂。	
			{ 這碗茶濃。	
			{ 他太孩子氣。	
	主謂謂語句...	{ 我頭痛。中國地大物博。 他身體靈活。張先生教書很負責。		

あるかを知らない人には“中国的首都是北京.”というのである。上例(2)では“他”は職業から分類すると“工人”なのである。だから特別の状況でない限り“工人是他”とは言えない。

そのほか、前述した中国科学院語言研究所編の『中国語法講話』の分類のうち四番目の「主語＋述語構造が述語になっている文」、すなわち“我頭痛。”(わたしはあたまがいたい)のような文も一応つけ加えておこう。

以上の文を表で示すと第2表¹¹⁾のようになる。

- 註(1) 黎錦熙『汉语語法初步教程』p. 44 商務印書館, 北京, 1959年。
 (2) 王力『中国語法理論』上冊 p. 98, 中華書局, 北京, 1955年4月。
 (3) 呂叔相・朱德熙『語法修辭講話』p. 16, 開明書店, 北京, 1951年12月。
 (4) 中国科学院語言研究所編『中国語法講話』実藤・北浦訳 pp. 30-41, 江南書院, 1956年。
 (5) 曹伯韓『語法初步』pp. 22-23, 工人出版社, 北京, 1952年。
 (6) 実際に語法教科書『漢語』を補足説明する《漢語知識講話》の文法篇に黄伯榮『陳述句, 疑問句, 祈使句, 感嘆句』(1957年)がある。
 (7) 楊欣安・李運益・趙榮璇, 林序達編『現代漢語』第3冊 pp. 47-8
 (8) 張志公『漢語語法常識』香坂順一訳『中国文法基礎』(日訳名) p. 111, 江南書院, 1955年。
 (9) 前掲書 p. 98.
 (10) 前掲書 p. 74.
 (11) 香坂順一・望月八十吉「文練・胡附《中学語法教学》」『中国語学』35, pp. 32-3 1955年2月号。この表のまえには省略句および無主句の表がある。ここでは省略。

II

さて、文の分類が第2表のように整理がついてきたわけである。これらの文の強調について考察をすすめていきたい。第2表に示されている順序によりまづ名詞謂語句すなわち判断文からのべよう。

判断文の場合 謂語が名詞または名詞性の語であるときはききにふれたように日付, 曜日, 天気, 本籍, いつの時代などをあらわすときには繫詞“是”は用いなくてもよい。用いた場合はほかのものとくらべて, たとえばほかの日と

区別する気持を現わす。この場合は“是”が繫詞として用いられたときより強調がふくまれていると考えられる。この場合の“是”はアクセントをおいてよまれ、軽くはよまれない。

つぎに判断文の場合においては“是……的”構造をとった文章が可能かどうかを考えてみたい。“我是送打的。”（わたくしは郵便配達人です）のように型態上はあらわれるが、“是……的”構造の特徴である肯定、強調の意味は全くふくまれておらず、予想するに的のあとになにかあるのではないか、それが省略されているのではないかと考えられる。だから、この文はふつうの判断文であり“是”は繫詞であり、送信的は名詞であると考えられる。

“是”が繫詞として用いられるときは上の例のように、ほかと区別する場合をのぞき判断文で“是”はアクセントをおかないでよむ。この場合は特別な強調はふくまれていないが、“節約就是不浪费的意思”，“事实总是事实”に示されているように“是”のまえに副詞の“就”や“总”がついた場合はやや状況が異なってくる。これらは“jiùshi”“zongshi”と表記され、動詞として扱われているが、その内容をみると副詞の“就”や“总”が判断詞“是”に前置せられたものであるから、“是”は前置された副詞の影響をうける。そのため、これらの文章では“是”だけのものより当然その意味内容が複雑になる。これらのグループに入るものはつぎのようなものであろう。

就是（ほかでもない……だ）	总是（いつも……である）
老是（いつも……だ）	都是（すべて……である）
全是（すべて……である）	正是（ちょうど……だ）
只是（ただ……だ）	その他

描写文の場合 一般には“是”は用いないが、語気を強める場合とそのほか一面を肯定し他面を否定する場合、または修辭的な成語を補足語とするときに用いる。^[1] “这碗茶濃”という形容詞が述語になっている描写文を“这碗茶是濃”と言いかえることができる。『漢語語法常識』ではこの場合の“是”を“眞”（ほんとうに）あるいは“確實”（たしかに）といった意味に相当すると論じている。また『中学語法教学』では「“眞”，“很”（とても、たいへん）“一

定”(きっと、かならず)のような副詞的意義を表現上にあたえている……」⁽²⁾としている。そのほかの場合は本論では直接関係がないので省略する。

つぎに特別に強調の意味をもつ“是……的”構造をもった描写文を考えてみよう。(1)“这个人是老实的。”この型は形容詞文の(2)“这个人老实。”(3)“这个人老实。”(4)“这个人老实的人。”などに比較して強調の程度が特別つよい。(2)は描写文の典型であり、(3)はまえにのべた語気を強める場合であり、“是”は副詞であって判断詞ではない。(4)は主語がなんであるかを説明しているだけで、強調はすこしもふくまれない。

描写文のすべてが特別な強調の意味をもつこの“是……的”構造をとることができるかについて考えるには、この描写文の述語がどのような組立てからなっているかを究めなければならない。繆一之編著の『漢語語法基礎』はつぎの例をあげている。⁽³⁾

1. 志願軍勇敢.
2. 王同志大眼睛.
3. 普通話容易学.
4. 地主長袍馬褂.
5. 这个人脾气太急躁.
6. 中国地大物博人口多.

これらの述語は主語をどのように説明しているのだろうか。1. 述語の“勇敢”は形容詞で、主語がどのようなものであるかを説明している。2. 述語の“大眼睛”は名詞“眼睛”が中心語で形容詞“大”が修飾する型になっている名詞を中心にした偏正(従意+主意)語である。王同志の生理的特徴で主語がどのようなものであるかをのべている。3. 述語の“容易学”は動詞を中心にした偏正語であり、標準語の難易により主語を説明している。4. 述語の“長袍馬褂”は二つの名詞が組合さって出来た聯合語である。服装から主語“地主”の特徴を説明している。5. 述語の“脾气太急躁”は一つの文をなしており、“这个人”の“脾气”という角度から主語がどういうものであるかを説明している。6. 述語の“地大物博人口多”は三つの形容詞文からなり、“地”、“物”

“人口”の三つの面から主語の中国を説明している。

以上の文にそれぞれ“是……的”をつけ加えてみると、1. は典型的な型をつくるが、2. はきわめて不自然である。“王同志是大眼睛的”と文は一応完成するが、この意味は“王同志は大きな目の人です”の意味になり、原文を特別に強調したことには全くなならない。この理由は大眼睛は形容詞の扱いをしているがやはり“眼睛”の品詞が名詞であるためそのあとに的をつけて名詞化する必要がないからである。3. 4. は強調が可能であるが、5. 6. は疑問である。6. をもし中国是地大物博人口多的. とすれば文末の 国家を省略し、ただ主語が何であることを意味するだけで強調の意味をもたない判断文になってしまう。これらの点から考えると名詞を中心にした偏正句と述語が主語＋形容詞からなっている型には特別な強調を示す“是……的”はつけ加えることができない。

叙述文の場合 叙述文では主語＋動詞、主語＋動詞＋目的語、およびもう一つ多く目的語をとる二重目的動詞をもついわゆる授与型などがおもなものである。

まづ主語＋動詞と主語＋動詞＋目的語からなる叙述文をみてみよう。

1. 他从中国来。 我們有困难。
2. 他是从中国来的。 我們是有困难的。
3. 他是从中国来的人。 我們是有困难的人。
4. 他是从中国来。 我們是有困难。

4. は 1. に比べると語気がずっと強い、“是”にはアクセントがおかれる。
3. はとくに強調の意味はなく、“是”にアクセントはおかれぬ。2. では“中国から来た”という点に特別の強調がおかれ“是”にはアクセントがおかれる。

二重目的詞をもつ文の強調は存在しないと考えられる。“他給我一本書。”の場合、“一本書”は英語で言うならば“a book”に相当するため、どういふ本であるかについての具体的な意味は含まれていない。そのためそれを強調することは普通の言語環境ではおかしいことになる。この本という気持があると

きは“这一本書他是給我的.”といえるであろうが、これは処置式“把”を用いても表現でき、むしろ処置式であらわす方が明らかに一般的である。この場合直接目的語は“把”のすぐあとにつづいてその目的となり、間接目的語は、動詞のあとにおいてその他の要素になる。すなわち“他把这一本書給我了.”となる。

第2表では最後に主語＋述語構造文をあげている。しかし、これをとくに一つの文型としてとりあげている文法学者はほとんどなく、ただ中国科学院の語言研究所の『中国語法講話』がとりあげており、この意見をとりいれたものと考えられる。この述語構造文、たとえば“他身体好.”であれば“身体好”の部分にあたるが、これが述語になっているときには、主語を描写する作用であるのでひとつの形容詞と考えていいと思われる。このように考えると形容詞を述語とする描写文にいて差支えないことになる。すでに描写文のところで、この問題についてふれている。すなわち、このような文には“是……的”は構成せられないことを“中国地大物詩人口多.”の例をみながらのべた。

註(1) 張志公 前掲書 p. 101 および p. 103.

(2) 文鍊・胡附 前掲書 p. 10

(3) 繆一之編著『漢語語法基礎』pp. 58-60. 湖北人民出版社, 武漢 1957年。

III

つぎにそれぞれの文に共通した特徴をのべてみよう。

判断文 他是送信的.

描写文 这个人是老实的.

叙述文 他是从中国来的.

まづ以上三の場合を考えてみよう。

判断文はふつう“这是書”(これは本です)，“我是学生”(わたくしは学生です)などの文であるが、それでは説明に適切でないのとくに“送信的”をひとつの名詞と考えた例文をとることにしてみよう。

“他是送信的.”は(わたくしは郵便配達人です)という意味であり、そのは

かの肯定・強調はふくまれないことはまえにのべた。その理由は“送信”は動詞プラス目的語からなっているが“的”がつくことにより全体が名詞化されている。そのため文を構成させるために判断詞“是”が前置されたのである。ここでの“是”は省略することはできないし、軽くよむこともいうまでもない。なぜ肯定・強調の意味をとらないかはここでは明確にならないからつぎの描写文に移ろう。

“この人は老实的.”の場合は“この人老实.”という形容文が原形であった。形容詞“老实”は“的”がつくことにより判断文と同じように(まじめな人)という意味をもつ名詞に変化する。そのためやはり文を構成するためには判断詞“是”をとるのである。ここまではうえにのべた判断文の場合とまったく同じで肯定や強調の意味は存在しない。この場合の“的”は中心語がなくても“的”を用いることにより名詞の代替をなす構造助詞なのである。だがこの同じ文について別の分析をすることができる。すなわち、“的”は事実や推定などにたいして確認するはたらきの語気助詞とかがえる方である。だから“老实”は相変らず形容詞であり、そのうしろに語気助詞の“的”がついたのである。さらにそのことを強調するために“是”がついたのである。この“是”はさほど強調をしなくてもいいとかがえる場合には用いなくてもいいのであるから省略することができるのである。もし省略されなければアクセントをおいてよむ必要がある。それゆえ、構造助詞の“的”がついて名詞化されたためまえに判断詞“是”がおかれた場合とに文型はまったく同じであるが、その意味するところは大きな差違が存在する。繰りかえしてのべると語気助詞“的”は事実を確認するはたらきをするのであり、まえにある“是”は判断詞でなく強調を示す“是”であり、よむときはアクセントをおくのである。Ⅱでのべた場合は“この人は老实的人.”の場合がすぐあとにはっきりとあるため説明をはっきりさせる目的で「……に比較して強調の程度が特別つよい」と説明したが、実際にはいまのべたように二つの意味があるのである。

叙述文の場合も描写文とまったく同じである。判断文の場合にあげた例は説明のため名詞化されたものをあげたが、この文から“是……的”を除去すると

“他送信.”となる。他送信（手紙をおくる）ならば動詞文なのである。だから叙述文の説明はまえとまったく同じである。構造助詞の“的”がついた場合と語気助詞“的”がついた場合とではその意味するところが異なり、前者は（かれは中国から来たひとである）、後者は（かれは中国か来たのである）となる。この叙述文のときの“是”もアクセントのおきかたはまえと同じである。

以上のように同じ構造をもつ文であってもその意味が大きく異なり、そのために混乱がおこりはしないだろうかという疑問がおこるわけだが、そのためにはつぎの識別法を用いると簡単にいづれであるかが明確になる。すなわち、“是”を省略してみて、省略できなければ構造助詞である。なぜなら、この場合は“是”がなければ名詞性の句だけでは文章はなりたたないからである。“是”を省略できれば“的”は語気助詞である。省略したために文章が構成できないということはなく、ただいくらか強調の気持がうすらぐだけである。

この“是……的”型の文の強調の場合についてソ連の文法学者ドラグーノフは二重強調であるとしながら、「消極的には“的”を用い、積極的には“是”を用いる」⁽¹⁾とのべている。これは“是……的”の文型をもつ文がすこぶる強調の程度が高いことを示すものであろう。

註(1) ドラグーノフ「現代漢語語法研究」「中国語文」、1955年6月号 p. 27.

IV

中国語の表現のなかには強調の表現法は多いがとくに“是”に関連した“是……的”の型をとりあげ、これまでどのような文に適用されるかされないかをみてきた。ここで整理してみると判断文の多くと描写文のうち「名詞を中心語とした偏正句（従意＋主意句）と文の一部に主謂型がふくまれているとき（主謂語文）のときをのぞいて“是……的”は適用できる。もちろん判断文は常に判断詞“是”を用いて強調を示しているのである。

この表現法を用いた文をさいきんの出版物から見てみよう。1957年に発表された毛沢東「关于正确处理人民内部矛盾的問題」を例にとってみると“是……的”を用いた文が112 あげることができた。この論文の字数は30,000字以下の

ものであることからみるとこの 112 という数字はかなり多いと考えられる。⁽¹⁾

この論文の冒頭近くに“我們的国家現在空前統一的。”⁽²⁾ があらわれる。“是……的”がなければ“統一”という動詞が述語になっている叙述文であるが“是……的”の形式をとったことにより統一ということが強調せられている。“的”は語気助詞であり、統一されたという事実を確認しており、“是”は語気をつよめているのと解することができる。“我們的国家現在空前統一。”と比較すると“是……的”を用いた前者の方が力強く主張されている。⁽³⁾ この文でもし“是”を省略したとしても強調はいくらか減ずるが、本来の意味から大きく変えることはない。

つぎに“人民内部的矛盾，在劳动人民之間説来，是非对抗性的……”⁽⁴⁾（人民内部の矛盾は勤労人民の立場からいえば非対抗性的のものである）は“非対抗性”が名詞であるから，“的”がつくとすれば“もの”あるいは“ひと”を予想していると考えられる。この文は“是”以下が名詞であるため“是”を省略するとすれば文は構成されなくなる。このため、構造助詞“的”で構成された述語であると考えられる。

つぎに形容詞が述語になっている例をあげてみよう。“……，生産力的發展一直是非常緩慢的。”⁽⁵⁾（……，生産力の發展はずっとたいへん遅かった）形容詞は述語になりうることは中国語の特徴のひとつであるから，“是……的”を省略しても文章は構成される。このことから“的”は語気助詞であり確認を表現しており，“是”は強調を示している。

最後に動詞プラス目的語が述語になっている例について考えてみよう。“我們是堅持和平反对战争的。”⁽⁶⁾（われわれは平和を堅持し戦争に反対するものである）では“的”のあとにひとやものが存在するだろうことは全くかんがえられず、また“是……的”を省略しても文は構成される。このことから“的”は語気助詞であり，“是”は強調を示している。

以上のことから構造助詞の場合は“是”以下が名詞あるいは名詞性のときに限られるようである。その場合は強調はあまりふくまれていない。そのほかの場合は文末におかれている“的”は語気助詞であって確認する気持がふくまれ

“是”が加わるとさらに強調がつけ加えられることとなり、文全体としては非常にきっぱりとし、盛りあがるような感じをあたえるのは、このような確認・強調が文にふくまれているからであろう。

資料に用いた“人民内部の矛盾を正しく処理することについて”のなかで、“是……的”をふくむ文のなかの品詞を分けてみると、動詞46, 形容詞27, 名詞12, それに動詞プラス名詞が27, 合計112であった。名詞の場合にはさきののべたように強調はふくまれないから、強調をふくむ文は丁度100例になる。

中国語における強調はこの型だけでないことは言うまでもない。この“是……的”型の強調文のほかに多くの強調型がある。それらと一体となった現代中国語はより一層語調がたかいものであることがはっきりすることと思われる。

註(1) 資料とした『毛主席の四篇哲学論文』（人文民出版社，1964年）は一段22字，行数は23であるので1ページ 22字×23＝506字である。“是……的”構造をもつ文が250字に一回用いられていることは一ページに2回使用されていることにもなる。

なお，“実践論”（1937年7月）においては字数10,000字あまりのうち33（動詞26, 形容詞6, 名詞1），“矛盾論”（1937年8月）においては字数25,000字あまりのうち84（動詞46, 形容詞29, 名詞9）の“是……的”型が用いられている。名詞の場合を除いてもその使用頻度は，1957年2月の論文「关于正确处理人民内部矛盾的问题」にくらべいくらか低い，文学作品と比較した場合には圧倒的に高い。

(2) 『毛主席の四篇哲学論文』p. 77, 人民出版社，1964年。

(3) “我们的国家现在是空前统一的。”の例文において，“是……的”がついたことにより叙述文から判断文に変化すると主張がある。Loh Dian-yang; Translation, *Its Principles and Technique*, 北京 時代出版社 1959, Book Two, pp. 30～33 その例として“中国人民擁護自己的政府。”という叙述文を“是……的’，を用いることにより判断文とし，さらに，“毛主席偉大。”という描写文を同じ方法で判断文に変化するとしている。明解ではあるが“的”をもつ構造助詞と語氣助詞の区別がはつきりしない。

(5) 前掲『論文』p. 90.

(6) 前掲『論文』p. 121.